

Book Review 36-5 女殺し屋 #破果

『#破果』（ク・ビョンモ著）を読んでみた。韓国で話題の小説である。2024年、第15回翻訳ミステリー大賞受賞。

著者は、韓国人作家。リアリズム小説、SF、ファンタジーなど、ジャンルを超越した多彩な作品を発表し続けている。

本書の主人公は65歳の女殺し屋である。殺し屋小説は巷に溢れているが、高齢女性の殺し屋は珍しい。本書の発表された2013年当時は話題にもならなかったものが、その後世界的なフェミニズム運動（#MeToo運動）の高まりを経て再評価されて改訂版が刊行されたのだという。主人公が無力に見える高齢で、か弱い女性ということがフェミニズム運動にマッチしたのだろう。翻訳があつた岩波書店から発刊されたのも単なる殺し屋小説ではないことを伺わせる。最近、この女殺し屋の誕生を濃密に描き出すスピンオフ（『破碎』）も出版・翻訳されている。また、韓国では映像化したとき、どのベテラン女優が適任かという議論も盛り上がっているようだ。

女が殺し屋稼業一筋で45年間を過ごし、老い（自分の死）の問題に直面している。一頭の老齢犬と暮らしている（犬の死にも気を配る）。年相応の振る舞いが求められるが、一方で65歳になってもジム通いせずに体は鍛えなければならない。他人からお母さん呼ばわりされることを拒む。かつて名を馳せた腕利きの女殺し屋も老いからは逃れられず、ある日致命的なミスを犯してしまう。ここでは殺しの任務を防疫と呼ぶ。彼女はシアン化合物の塗られたナイフを使って防疫するのだ。

彼女が防疫の仕事をはじめた経緯は物語の中盤で明かされる（『破碎』で詳細に語られるようだ）。殺し屋としてしか生きられなかった事情があつたのである。老いた殺し屋がより若いライバルの殺し屋によってその地位を脅かされ、不利な闘いを強いられるというパターンの作品である。その若いライバルとなる男と彼女との間には因縁がある。後半、この男との死闘が綴られ、読みどころでもある。この騒動に不運にも巻き込まれた若い医師とのやりとりも興味深い。

ある読者はいう。「彼女を縛るものは二つ、時間と社会のしがらみである。彼女はそれを暴力によって打破していく。犯罪小説はこう書くものなのだ。」

日常の中に、か弱い女性殺し屋が潜んでいて、誰かに依頼を受けた彼女に狙われるとしたら怖い話である。